

ところが、主は…

丸山 勉

〔聖書〕 創世記 12章 10節～20節

その地方に飢饉があった。アブラムは、その地方の飢饉がひどかったので、エジプトに下り、そこに滞在することにした。エジプトに入ろうとしたとき、妻サライに言った。「あなたが美しいのを、わたしはよく知っている。エジプト人があなたを見たら、『この女はあの男の妻だ』と言って、わたしを殺し、あなたを生かしておくにちがいない。どうか、わたしの妹だ、と言ってください。そうすれば、わたしはあなたのゆえに幸いになり、あなたのお陰で命も助かるだろう。」アブラムがエジプトに入ると、エジプト人はサライを見て、大変美しいと思った。ファラオの家臣たちも彼女を見て、ファラオに彼女のことを褒めたので、サライはファラオの宮廷に召し入れられた。アブラムも彼女のゆえに幸いを受け、羊の群れ、牛の群れ、ろば、男女の奴隷、雌ろば、らくだなどを与えられた。ところが主は、アブラムの妻サライのことで、ファラオと宮廷の人々を恐ろしい病気にかからせた。ファラオはアブラムを呼び寄せて言った。「あなたはわたしに何ということをしたのか。なぜ、あの婦人は自分の妻だと、言わなかったのか。なぜ、『わたしの妹です』などと言ったのか。だからこそ、わたしの妻として召し入れたのだ。さあ、あなたの妻を連れて、立ち去ってもらいたい。」ファラオは家来たちに命じて、アブラムを、その妻とすべての持ち物と共に送り出させた。

〔序〕 美談だけではない聖書

神様は、例えばモーセにご自分を現された時、「わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブの神である」と言われました。それは、アブラハムの物語、イサクの物語、またヤコブの物語を思い起こしなさい、そうすればわたしがどのような神であるかが分かるはずだと、そのような意味を持って言われているように思います。

では、そのように名前を挙げられているアブラハム、イサク、ヤコブという人物は欠点が全くないような信仰の人だと言えるのでしょうか？

私たちは先週から「創世記」に出てくるアブラハムの（この時はまだアブラムですが）生涯の物語を見ていますけれども、どうもそうではなく、恥の部分を持ちあわせている人物であることが分かります。聖書は美談だけを記している書物ではありませんね、そこは大事な所ではないでしょうか。

〔1〕 アブラムの二つの過ち

アブラムの出発点、そこはとても信仰的に学ばされます。12:4にはこのように記されていました。「アブラムは、主の言葉に従って旅立った。」至ってシンプルです。彼は自分の声に従ったのではなく、主の御声に従ったのです。アブラムが「祝福の源となる」のだと神様から言われたのも、他でもなく、何よりも主の御声こそが自分を生かすことを知って生きることが祝福そのものだ、という意味もあるのではないかと思います。

そのアブラムがこの12章で二つの過ちを犯しました。

一つは、神様が導き、与えられた土地に留まらず、エジプトに移っていったことです。飢饉があったから仕方がなかったと言えなくもないのかもしれませんが、そうであれば一時戻ることも出来たでしょう。エジプトは穀物も豊かにあって、生きていくために一時そこに移住することは悪いことではないかと思っただけなのでしょう。そしてそれが不信仰だとも思っていなかったのかもしれませんが、けれども誤った決断が取り返しのつかないことになっていくことに繋がったのです。

もう一つの過ちは、そのエジプトに入る際に、妻のサライを自分の妹だと偽り、ファラオの宮廷に召し入れてしまった事です。ここにはアブラムの「恐れ」があったのだと思います。妻が美しいので、エジプト人は私を殺して妻を奪うかもしれないと。アブラムなりに生きる術を考えたのかもしれませんが、それは、妻をファラオのハレムに渡すことであり、ある意味妻を捨てるに等しいことです。アブラムは妻に言いました。「どうか、わたしの妹だ、と言ってください。そうすれば、わたしはあなたのゆえに幸いになり、あなたのお陰で命も助かるだろう。」なんと自己本位かと思えますね。妻サライの言葉はここでひと言も書いてありませんね。サライは言葉を失うほど苦しんだ、ということもあるのではないのでしょうか。

ところが、アブラムの思惑通り、いやそれ以上に、アブラムにとっては濡れ手に粟と言いますか、予想外の財を受けることになったのです。14 節以下です。「アブラムがエジプトに入ると、エジプト人はサライを見て、大変美しいと思った。ファラオの家臣たちも彼女を見て、ファラオに彼女のことを褒めたので、サライはファラオの宮廷に召し入れられた。アブラムも彼女のゆえに幸いを受け、羊の群れ、牛の群れ、ろば、男女の奴隸、雌ろば、らくだなどを与えられた。」

さらに驚くべき事態が起こります。サライを召し入れたファラオとその宮廷の人々が、酷い病気にかかったと言うのです。この時のアブラムの心境を想像してみるとどうでしょうか？ とても恐ろしくなったに違いないと思うのです。自分の恐れから始まった行動の結果、自分は思いがけない幸いを受け、逆にエジプトの王と宮廷の人々に災いが下っている。これは一体どういうことだ！ と恐くなったのではないのでしょうか？

ファラオはその真相を見抜いたようです。アブラムに言いました。18 節以下です。

「あなたはわたしに何ということをしたのか。なぜ、あの婦人は自分の妻だと、言わなかったのか。なぜ、『わたしの妹です』などと言ったのか。だからこそ、わたしの妻として召し入れたのだ。さあ、あなたの妻を連れて、立ち去ってもらいたい。」ファラオは家来たちに命じて、アブラムを、その妻とすべての持ち物と共に送り出させた。」

かくして、アブラムは自分の居るべき場所に引き戻されたのです。このことをなされたのは神様です。アブラムの人間的な計算や、良かれと思った判断も、結局神様によって軌道修正されているのです。それは神様の憐れみではないのでしょうか？

[2] 懲りないアブラハム

けれどもアブラムは懲りないと言いますか、この創世記の少し後の 20 章でも同じような罪を犯しているのです。もうこの時は名前も神様によってアブラハムと変えられた後、つまり、神様との間に契約を結ぶという大きな出来事の後のことです。

20 章の初めのほうだけお読みしてみますとこうです。

「アブラハムは、そこからネゲブ地方へ移り、カデシュとシュルの間に住んだ。ゲラルに滞在していたとき、アブラハムは妻サラのことを、「これはわたしの妹です」と言ったので、ゲラルの王アビメレクは使いをやってサラを召し入れた。その夜、夢の中でアビメレクに神が現れて言われた。「あなたは、召し入れた女のゆえに死ぬ。その女は夫のある身だ。」

今度はゲラルの王様アビメレクに、サラを妹だと偽ったのです。アビメレクは神様の声によってサラがアブラハムの妻だと知り、このままだと自分がそのことのために神様に打たれて死んでしまうということが分かって、アブラハムに、とんでもないことをしてくれるなど言うのですが、アブラハムは酷い言い訳をしています。20 章 11 節以下です。

「アブラハムは答えた。「この土地には、神を畏れることが全くないので、わたしは妻のゆえに殺されると思ったのです。事実、彼女は、わたしの妹でもあるのです。わたしの父の娘ですが、母の娘ではないのです。それで、わたしの妻となったのです。」—アビメレクに申し訳なかったと言うどころか、あなた方は神様を信じていないので殺されると思ったのです、また、サラは同じ母からではないけれども、父が一緒なので兄弟とも言えるのですと、場違いなことを述べています。

この後、アビメレクは、アブラハムに妻サラを返し、また家畜や奴隷、また銀貨一千シケルを与えて、好きな所に住んでくれとまで言いました。そしてアブラハムがアビメレクとその妻や侍女たちのために祈ると、神様は彼らを癒されたとあります。実に不思議な、また納得し切れない物語ではないでしょうか？

私たちが納得し切れないのは、アブラハムが罰せられるのなら分かるのに、そうではなく、12章ではファラオとその宮廷の者たちが、20章ではアビメレクやその妻、侍女たちが苦しい目に遭っていると言うことです。これはどう理解してよいのか、分かりかねます。

[3] 神様の介入—「ところが、主は」

今日の12章でも、また20章でも、アブラハムは情けない姿を露呈してしまっていますね。アブラハムの正しさというようなものはここでは見えません。

ヴァルター・リュティという20世紀半ばに活躍したスイスの牧師がいて、創世記の講解説教をしたのですが、この箇所からこのようなことを語られました。

「信仰の模範とされるアブラハム。しかし信仰者という者は、低俗なこと、卑しいことから超越して、清らかに生きる、何か、特別な者に守られて生きているのだと考えているなら、そういう考え方は改めて頂きたい。そしてそのような私たちの生活の中に神様が入ってこられなければならないのです」と語りました。事実、神様はこの罪を見過ごしにはされずに、介入されたのです。

神様は生きておられます。神様は罪を審かれるお方です。12:17をご覧ください。これが神様の審きです。「ところが主は、アブラムの妻サライのことで、ファラオと宮廷の人々を恐ろしい病気にかからせた。」…エツという感じではないでしょうか？ 神様、それはおかしくありませんか？ 罰を受けるべき存在はアブラムでしょう？—そうなのです、それが私たちが持っている常識の声、勧善懲悪の声、理性の声です。けれども、神様は真に恐ろしい方です。私たちの判断や思いを遥かに超えたなさり方で歴史を動かされるのです。正に「ところが、主は」なのです。

アブラムは約束の地に留まることが出来ず、おのが判断でエジプトに下りました。「ところが主は」、そのエジプトから再び約束の地へと戻されました。

アブラムは妻サライをファラオの宮廷のハレムに送ってしまいました。「ところが主は」、異邦人の王ファラオに働きかけ、妻を自分の許に戻して下さいました。

さらに言えば、神様はアブラムを打たれてもアブラムは何の申し開きも出来なかった筈です。「ところが主は」、あなたは祝福の源となるのだ、と宣言されたアブラムを捕えて離さず、この後本当に「信仰の父」となってゆく生涯—大きな試練も与えられながら、アブラムからアブラハムに成長していく生涯—を生きるようにされているのです。

詩編 139 編の中にこのような詩がありますね。

「どこに行けばあなたの霊から離れることができよう。どこに逃れれば、御顔を避けることができよう。天に登ろうとも、あなたはそこにいまし、陰府に身を横たえようとも、見よ、あなたはそこにいます。曙の翼を駆って海のかなたに行き着こうとも あなたはそこにもいまし、御手をもってわたしを導き、右の御手をもってわたしをとらえてくださる。」

けれども、私たちは今日の物語で見過ごすことが出来ないのは、神様は必ず罪の清算をされているということではないでしょうか。「生ける神の御手に落ちるのは恐ろしいこと」(ヘブライ 10:31)なのです。アブラムに代わってファラオを神様は打たれました。20 章ではアビメレクを打たれました。罪のない人を、アブラムの罪に代わって打たれたのです。私たちはここで、それを理不尽だと言いたくなりますけれども、どうでしょうか？ 私たちの救いのために、最も理不尽なことを神様はなされたのではないですか！

「罪と何のかかわりもない方を、神はわたしたちのために罪となさいました。わたしたちはその方によって神の義を得ることができたのです。」(コリントの信徒への手紙二 5:21)

神様が、私たち罪人を救うために歴史に介入された、その愛の最大の現れは、十字架だったのです。神様のなさり方は、私たちの頭を遥かに凌駕しているのです！

[結] どこにあなたのハートがあるのか、が問われている

さて、今日のような箇所を読みますと、私たちは正直、不安になりますね。「アブラハムでさえこうであるなら、信仰生活、とても自信が持てません」と私たちは言うかもしれません。けれども、それは違うのです。アブラハムに目を留めるのではなく、こんなアブラハムにさえ目を留め続け、一度御手の内に捕えて下さった存在を神様はどんなことがあっても導き給うのだ！という、神様の真実、イエス様の真実にこそ目を留めようではありませんか。

私がよく立ち戻る信仰の言葉がありますので、それを最後にご紹介したいと思います。P・T・フォーサイスという神学者が書いた『キリスト者の完全』という本の中からの言葉です。

「どこにあなたのハートがあるのか。何が全体としての意志の傾向であり、全的生活の方向であり奉仕であるのか。罪がどれだけあり、犠牲的行為がどれだけあるか、ということではなく、問題は、悔改めをもってであれ、歡喜をもってであれ、心情が帰りゆくホームはなにかということでもあります。神は、全体で判断されるのです。個々の単位によってではなく、全体と真髄とによって判断されます。(作曲家の)ベートヴェンは、演奏者が弾きまちがえることは気にかけなかったが、その作品の精神と意図を誤った場合には怒ったといっています。このことは、人生の偉大なる批評家・芸術家(神)にとっても同様であるのです。」

このようなことも言います。

「完全とは、罪なきことではなく、結局において、信仰によってキリストに対して忠誠であることです。究極の判断は、各瞬間に立っていたか、ということではなく、結局において立っているか——最後に、全体として立っているか、ということでもあります。完全とは、全体性です。私たちの完全には、絶えず常に、悔い改めの要素があります。私たちの終極的な賛美の交響楽には、悔い改めの深い低音があります。」

私はこの言葉にいつも大きな慰めと、また励ましを頂くのです。私たちの信仰生活、確かに「ああ、やっちゃったなあ」と言うような失敗も多いのですが、「全体として」どこに立っているか—立ち続けるか—が問わ

れているのではないのでしょうか。罪を犯したら、その度にイエス様に立ち戻れば良いのです。

これからご一緒に歌う讃美歌「神はわがやぐら」でも、私たちの罪を飲み込んでしまうキリストと言う堅固なやぐらの中にかくまわれている私たちはこの歌詞を大胆に歌うことが出来るのですね。

1節で言います。「おのが力、おのが知恵を頼みとせる黄泉の長もなど恐るべき」と。

お祈りを致します。

主イエス・キリストの父なる神様、感謝致します。

あなたに声をかけられ、信仰の歩みを始めた私たちです。けれども、時に情けない自分自身の姿を露呈してしまったり、誤った判断をしてあなたを見失いそうになってしまうことがあります。しかし、あなたは、憐れみに満ちたお方です。私たちを決してあなたの御手の内から手離すことなさいません。その証拠に、私たちに、私たちといつも共に歩まれる主イエス・キリストを与えて下さっています。そしてその方が今日も「わたしにつながっていなさい」と仰ってくださいます。どうか、私たちが、おのが力、おのが知恵に頼むことから救い出して下さり、日ごとに、あなたの恵みの中で新しくして下さいますよう、お願い致します。

今日、ご一緒にみ言葉に聴き、礼拝を捧げられましたことを感謝致します。この一週間もどうぞ私たちと、また、私たちの家族と伴っていて下さい。

この場に来ることが叶わなかった方々の上にも、あなたの恵み、癒し、励ましがございますように。

救い主イエス・キリストの御名によってお祈り致します。 アーメン。